

竜馬は役人に興味が持てず、 世界に出たかったのです

命はできないと考えました。

革命というのは、えらい大仕事なのです。人がたくさん死にます。

しかし当時はテレビも新聞もありません。満天下に世の中の変わりを示す必要があった。薩摩の卑しい侍の西郷が將軍の首を切ることで世間に知らしめる。大久保利通としむちもそのつもりでしたし、土佐の室戸岬むろに銅像が建っている中岡慎太郎などは強烈に倒幕戦を主張していました。

中岡慎太郎も名文家ですね。「陸援隊」の隊長で、竜馬とともに近江屋で暗殺されるのですが、その少し前に見事な文章を残しています。

「戦の一字あるのみ」

ということだけ書いた文章です。革命とはただ「戦」あるのみ。

親友の中岡も、西郷も反対して、大政奉還でした。しかし竜馬はこれを実現させます。

大政奉還は京都の二条城の会議で決まりました。出席者は各藩の代表者で、土佐からは執政の後藤象二郎、薩摩からは家老の小松帯刀たてわきが出席しました。後藤は竜馬から大政奉還についての入念なレクチャーを受け、その場に臨んだ。本来、陪臣の後藤や小松が將軍に会ったり、話したりすること自体がもはや革命でしたね。

徳川慶喜とよのぶという人は大変な政治家でした。小松、後藤から出た大政奉還案に賛成し、それに乗ると言った。

京都の宿屋で知らせを聞いた竜馬は、慶喜に感動します。これまであれだけ倒そうとしていた將軍に対し、

「この將軍のためなら命もいらぬ」とまで言った。

後世の歴史家は徳川慶喜を評価しませんが、私は明治維新の最大の功績者は慶喜だと思っています。

当時、竜馬だけがその偉さを理解した。カチカチの勤王の志士が聞いたら大変な言葉ですね。竜馬はいつから佐幕になったのかと、怒りだすにちがいません。

土佐の佐川さかという町の出身で、田中光顕みつあきという人がいました。のちに宮内大臣などをつとめる人です。幕末に田中光顕は脱藩して、伊予に抜け、長州に逃れます。回想録を残していて、当時、勤王といえど火付け強盗という語感と同じだったと語っています。非常に卑しめられた言葉

だったという。

明治の世の中が固まり、勤王の志士といえは非常に高雅な紳士をさす言葉になったのですが、田中光頭はいい言葉を残してくれましたね。

歴史のなかでいちばんわかりにくいのは、語感、その時代の感覚というものです。革命家としての田中光頭はそんなに重要な人物ではありませんが、やはり土佐ならではの表現能力をもっていた人でした。

竜馬はその「勤王」の志士の一人ではあります。しかし、熱っばい、あまり考えているとも思えない大多数の勤王の志士たちとは明らかに違う。

竜馬には勤王も佐幕もなかったのです。革命家でありながら、アウトサイダーではなく、インサイドにいて日本の設計図を持っていた。おそらく竜馬が持っていた設計図は、アメリカに似た制度だったと思うのです。

ただ薩長の考え方は違いました。

できあがった明治政府には、国粹的なセンスが濃厚にありました。勤王を支持してきた庄屋階級の人物は多かったのですが、彼らの多くは国学派でした。

長州藩の藩内革命のパトロンは、白石正一郎という人物で、待ではありません。商人というよりも国学者でした。

島崎藤村の『夜明け前』にでてくるおじいさんもそうですね。木曾の馬籠まごめの庄屋の身分に生まれ、国学にかぶれて勤王の仲間に入っていく。

西郷、大久保らは社会学的な頭を持っていた革命家ですが、国学者の中には、フアナティック（狂信的）な国粹主義者も多かった。彼らを抱き込んで革命は成功したため、「太政官」という言葉に代表される復古的な要素が明治維新にはつきまといいます。そのにおいを竜馬はかいだのではありません。どうも自分が思っている国

家の青写真とは違っていると、少し絶望的な気持ちもあったと私は思います。

あれやこれやで新政府の準備がはじまります。西郷は京都の薩摩藩邸にいて、竜馬に来てくれと頼みます。

竜馬は土佐藩でこそ郷士の小倅こせがらですが、世の革命家たちの間では、押しも押されもせぬ存在になっていました。だれが見ても土佐藩の代表でした。新政府の名簿を作ってくれと西郷は頼みます。竜馬がいまという閣僚名簿を作り、それを西郷は見る。しばらくして西郷が言いました。

「坂本さん、あなたの名前がありません」

竜馬に同行した陸奥宗光むつむねみつは生涯、このときの様子を語りつづけてきました。陸奥は明治二十年代に外務大臣をつとめ、日本の外交史上、不世出の働きを残した人でした。紀州の出身で、竜馬が好きでたまらなかつた。竜馬の人柄、思想、世界観、全部が